

# 馬と暮らす旧城下町再生の提案的研究

A Proposal for the Revitalization of the Old Castle Town Living with Horses

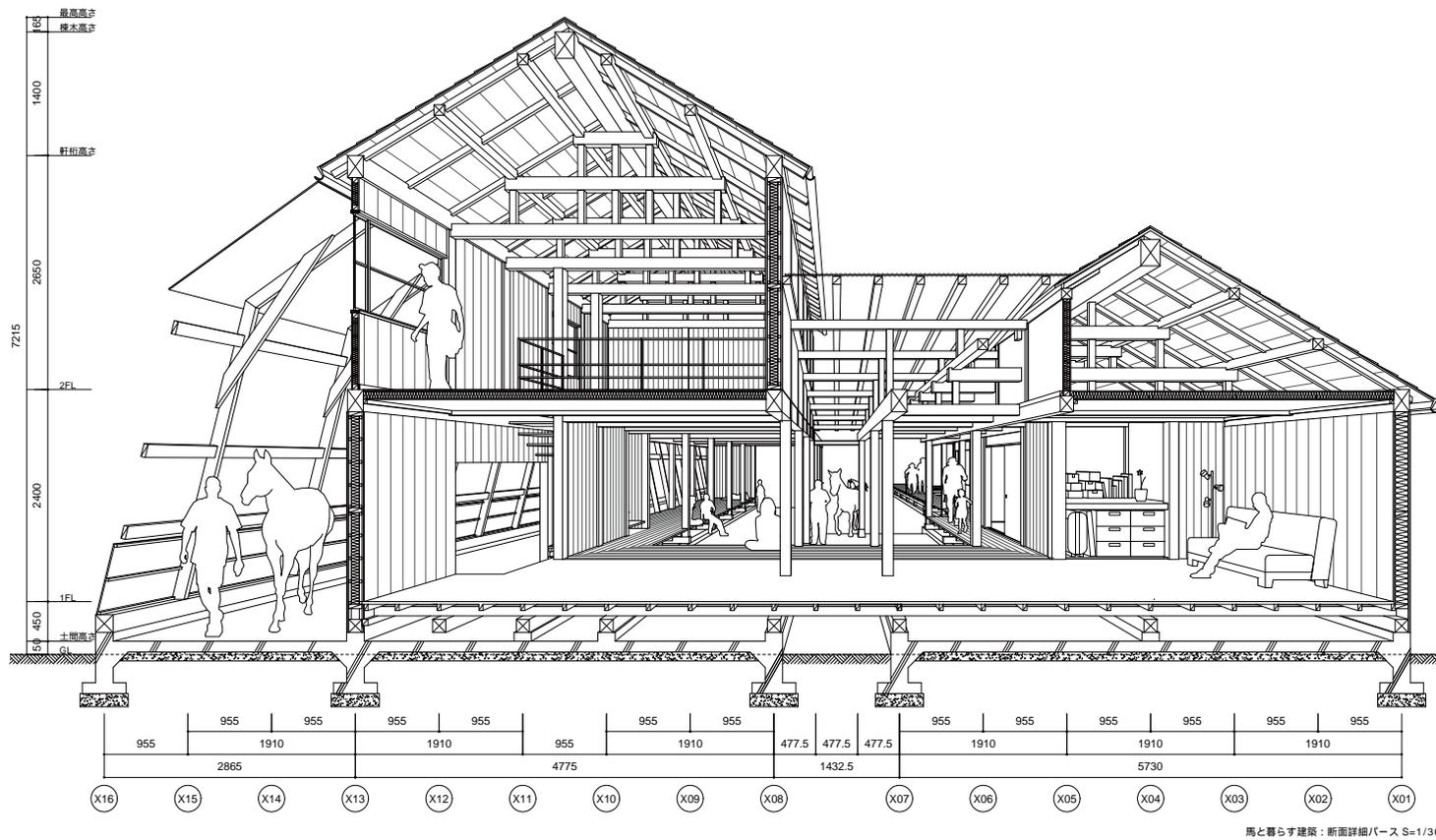
武蔵野大学大学院 環境学研究所 環境マネジメント専攻 太田恭輔

## 01\_背景と目的

柳田國男の『遠野物語』で知られる岩手県遠野市には、100年以上前の物語に出てくる景観が現在もかろうじて息づいている。

市街地では遠野固有の町家、集落では南部曲り家といった地域の特徴をもつ建築が残り、数百年前から脈々と続く馬との暮らしの文化も所々で目にする。しかしこれらは文化財的な価値を評価されず、次々と解体され衰退していく現状にある。

本研究では、遠野町家を軸にした都市構造の骨格と、市街地における馬と暮らす文化の再生を目指し、「馬と暮らす旧城下町」を形成するための第一歩の計画を行う。



## 02\_リサーチ

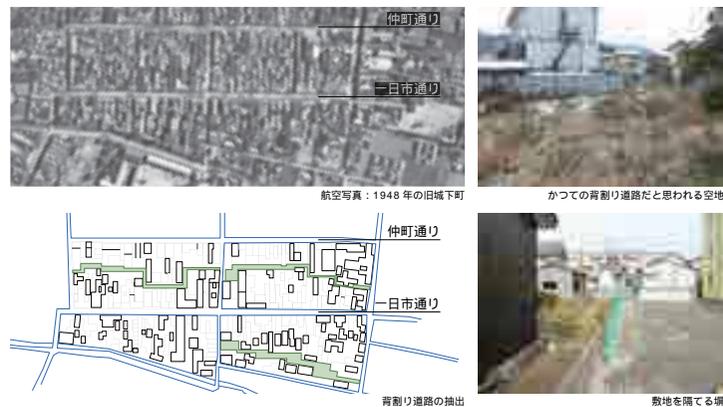
計画地：遠野市旧城下町について

旧城下町は鍋倉城を中心に軸線をとる通りと、それに直行する通りが配され、早瀬川と来内川に挟まれた半径1kmの半円形地域である。旧城下町を横切る一日市通りを含む釜石街道が表通りと言われている。遠野駅より、釜石街道に直行する中央通りが活気つき、裏通りであった仲町通りは、現在は市庁舎や蔵の道広場の整備によって段々と裏表の関係は入れ替わりつつある。駅前を中心に、行政機関が集まるエリアと、再開発が進んだエリア、西の大工町には社寺が集まり、南側の一日市通りに沿う商店街が、現在の街を構成している。



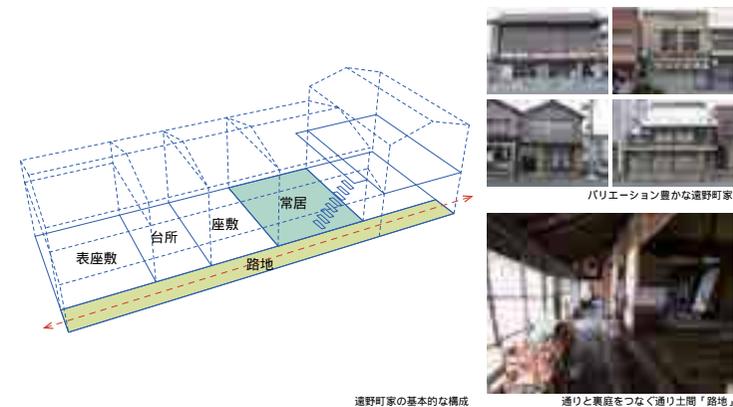
町割りに残る「背割り道路」

研究室の過去の研究から、街区の中に誰のものでもない「背割り道路」と呼ばれる空地があった事がわかっている。これは隣地の共有空間であり、子どもの遊び場であったり立ち話の行われる空間だったそうである。また、戦後のある時期まで遠野の市街地には敷地境界に塀がないのが一般的であり、人が敷地を跨いで行き来できたことが、この背割り道路を成立させていたと言える。この遠野独特のコミュニティ空間は、戦後遠野の敷地境界に塀が一般化したことで、共有空間として使われなくなってしまっている。



遠野町家の構成

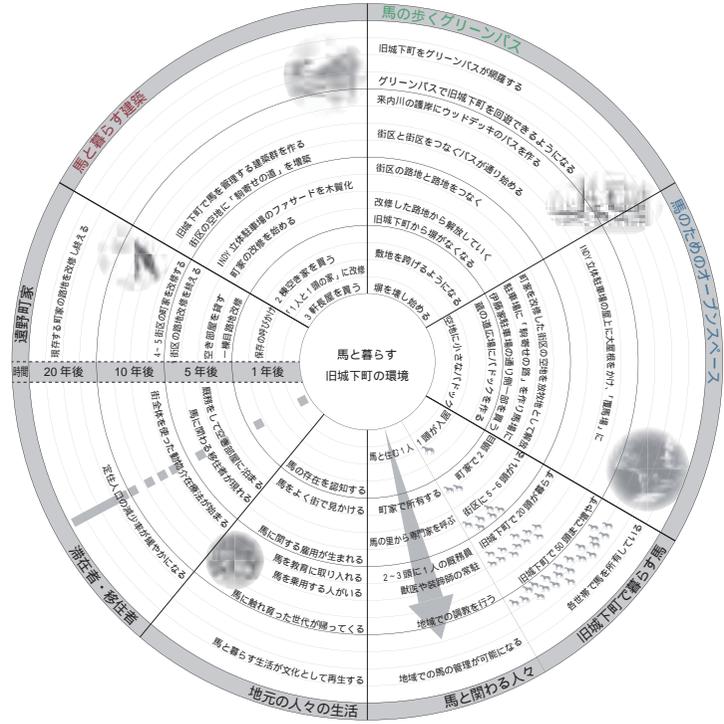
市街地に多く残る町家は、表通りから敷地奥の背割り道路に抜けていく「路地」（ロウジ）と呼ばれる土間空間があることが大きな特徴である。遠野の町言葉に「おどしっておくれんせや」という言葉がある。「ちょっと通ってください」という意味で、近隣の住人は声をかけながら、路地を通り抜けていた。住居の中を近隣の人が通り抜ける路地の空間が、城下町の住人たちの重要な場であったと言える。しかし、敷地が区切られ行き来がなくなると、この住人同士が顔を付き合わせる独特な生活文化は姿を消してしまった。



### 03\_コンセプト

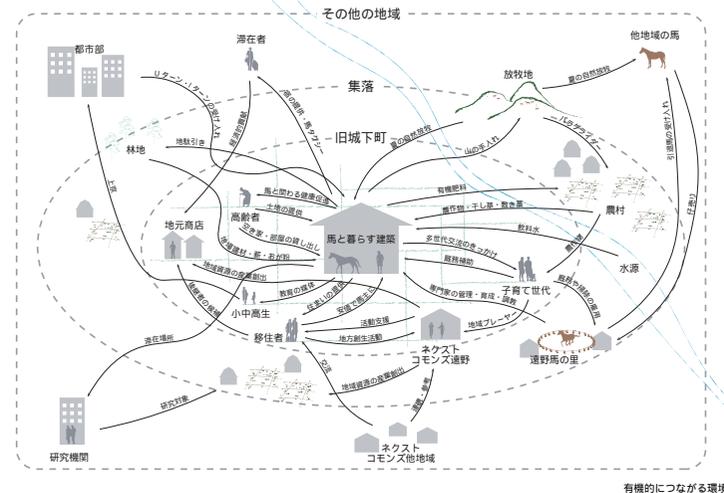
時間をかけて環境を作る

旧城下町で計画するインフラや建築を、少しづつ街に作ることで、**街の中で馬と暮らす生活文化を自然に再生**させていく。馬の頭数が増えると、次第に馬が地域に貢献できる事柄も増えていく。乗用や馬糞の堆肥利用はもちろん、地元の学校と連携した教育や、外部の人も利用できる動物介在療法など、**馬がいることによって街に発生する人々の生業は多く生まれる。**



馬と社会の関わりを作る

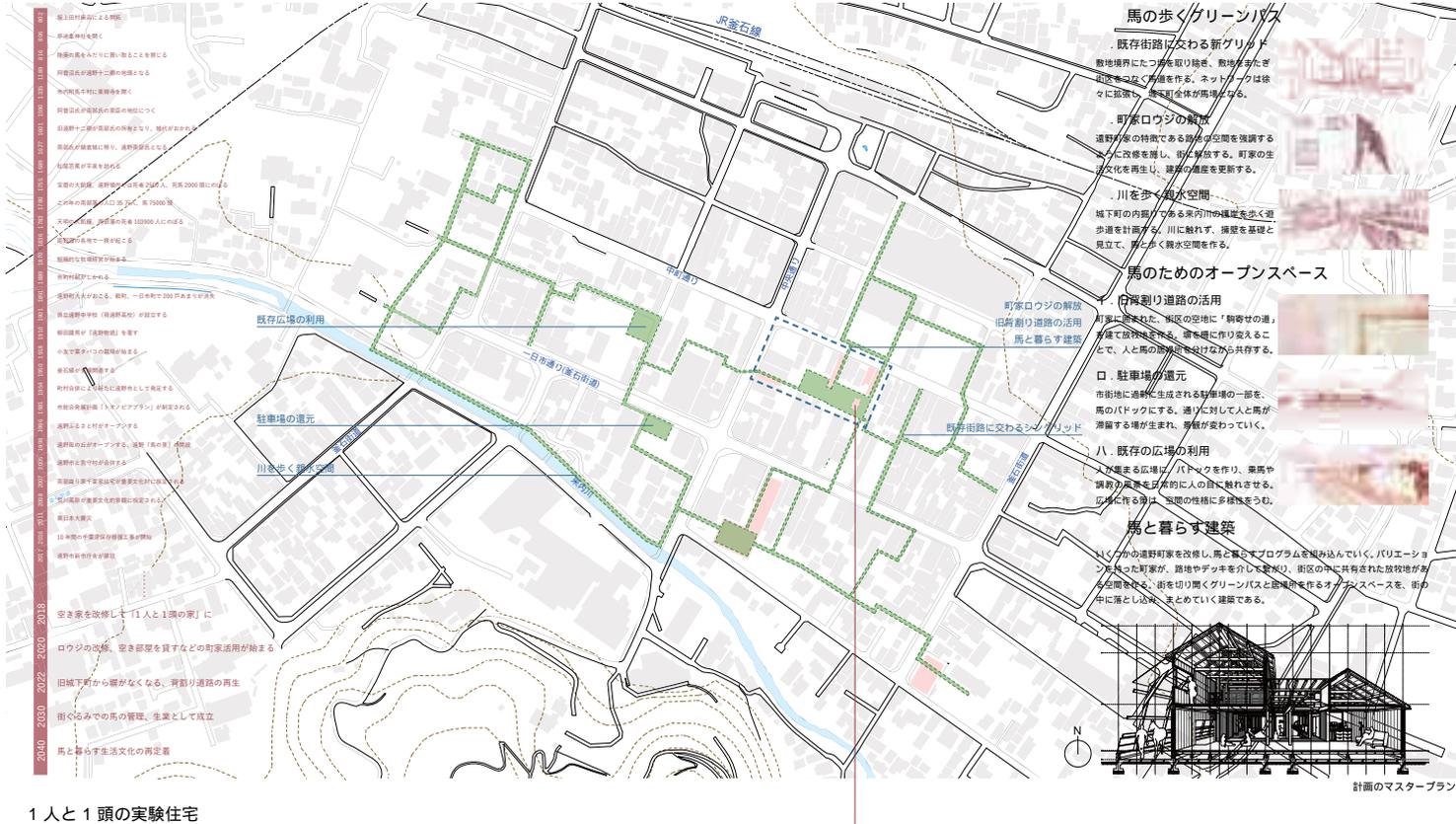
固有の生活文化、建築資産、馬産の歴史、これらを再構築を目指す計画として、市街地における馬との暮らしを軸に据えて、**自立した生業を循環させることを目指す**。町家の特徴的な空間を強調し、かつてのコミュニティを再生させることで、**空間の価値を可能な限り可視化する**。



### 04\_マスタープラン

馬と暮らす旧城下町の未来

旧城下町に新しく生まれる、「馬が歩くグリーンパス」、点在する空地や駐車場に設ける「馬のためのオープンスペース」、街の中心部に1街区をモデルに遠野町家の改修を施す「馬と暮らす建築」。これらを遠野における5-10年後の「馬と暮らす旧城下町」の未来として記す。



#### 1人と1頭の実験住宅

**馬と暮らす生活を目指す第一歩の計画**として、旧城下町でまず馬と人が暮らす小さな平屋の住宅を提案する。街区の空地に残された、空き家となっている小屋を改修して人と馬が同じ屋根の下で生活する。簡易な柵を設け、その中で馬を1頭放し飼いにする。長期的な目標を見据える計画として、**何よりもまず馬と人が市街地の中で暮らしているという状況を簡易的に作る**。そしてここから少しづつ時間をかけて、周りの町家へ空気が伝わり、それが街区を巻き込み、やがては通りを、そして旧城下町全体へと伝播していく。



空き家を改修し、1人と馬1頭が暮らす住宅を作る

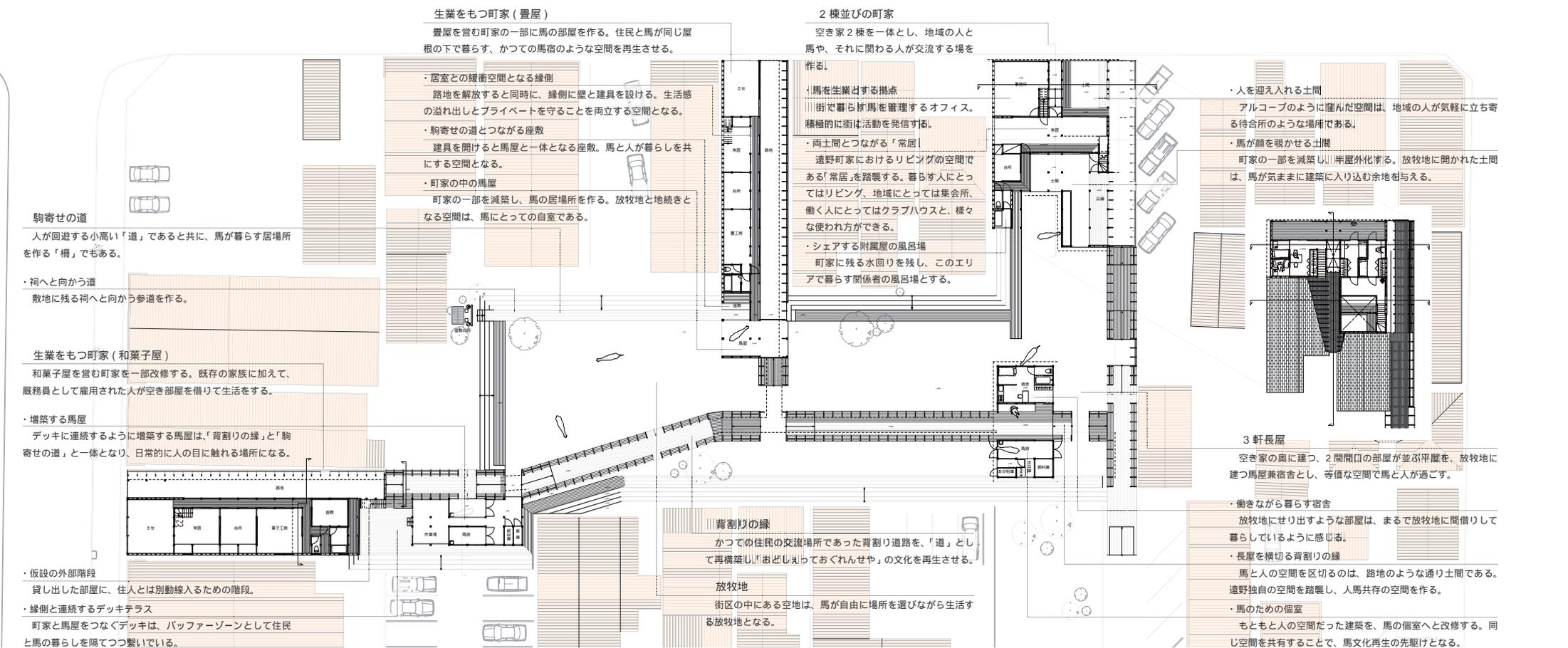


町家の奥に残る平屋の空き家

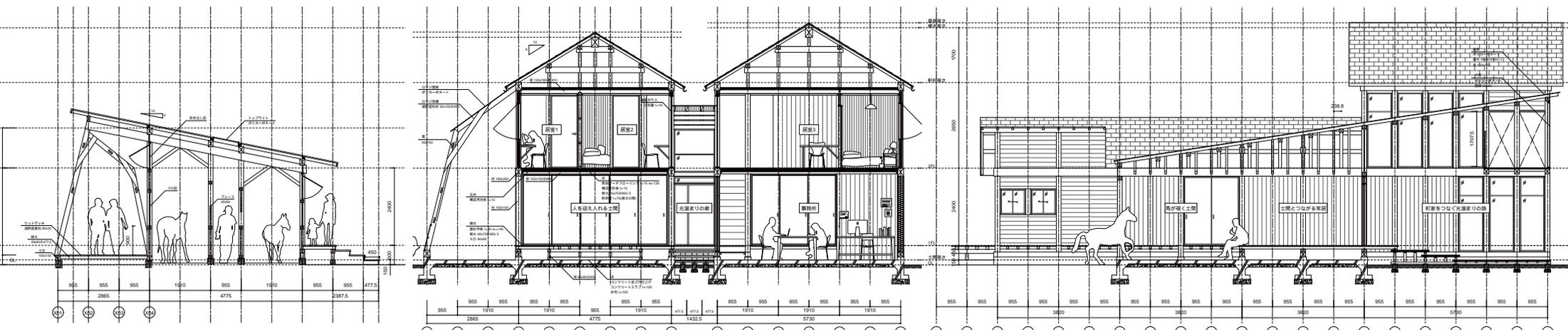


全体平面計画

一つの街区の中に放牧地を作り、路地を通じて通りや他の街区と繋がっていくような計画を行う。今回の街区には、いくつかのバリエーションを持った遠野町家が現存し、それらの構成や状況に適した、改修を施していく。1年目に計画する3軒長屋の活用に加え、4棟の町家の改修、敷地を共有した馬と人の居場所作りを行う。本計画では、市街地の町家という状況で、どのように馬と共存し、豊かな環境が作れるかという実験でもある。まず、街区内に馬が最低限暮らせる状況を作り、そこから町家に馬が食い込めるような土間ができた、路地を通り抜けられたりといった、外へ外へと広がっていくような空間が、建物や敷地を飛び越えて、作られ使われている環境を作る。



全体平面図 S=1/200



生業をもつ町家 (和菓子屋)・増築する馬屋 断面図 S=1/60

2 棟並びの町家 短手断面図 S=1/60

2 棟並びの町家 長手断面図 S=1/60